



アフリカ

No.78

NOW



ルワンダ国内に20ある障害者教育施設。高額授業料と寄宿費が必要となることが多いが、海外などから支援を得られる障害者は少ない。 撮影：曾田夏記（2ページから関連記事）

CONTENTS



目次

特集：アフリカ障害者の10年～アフリカの障害者の取り組みは今	2-15
Special Topic: Disabled people's challenges in Africa	
座談会：視覚障害者が高等教育機関で学ぶ～スーダンと日本の経験を語る	3-8
Visually-disabled persons talk about their study at higher education institutions in Sudan and Japan	
モハメド・オマル・アブディン、青木慎太郎、福地健太郎、星加良司	
視覚障害者への情報保障の技術と課題 齊藤龍一郎／後紛争国ルワンダにおける障害者の現状 曾田夏記	9
アフリカ障害者の10年 African Decade of Persons with Disabilities	中西由紀子 10-11
日本からアフリカ障害者の10年を支援する	宮本泰輔 12-14
Support of African Decade of Persons with Disabilities from Japan	
アフリカの現場から～ルワンダ On the spot in Africa: Rwanda	加藤悦子 16-17
『見る・つくる・知る おしゃれなアフリカ』シリーズを完成して	白鳥くるみ 18-23
The series of "Seeing, Making, Learning Osharena Africa" completed	
書評："Witness to AIDS" Book Review: "Witness to AIDS"	米良彰子 24-25
Meet Africa in Japan: African shop BOGOLAN Market	26-27
AJF 事務局から会員の皆さんへ～ひとつの結び目として	表4

視覚障害者が高等教育機関で学ぶ

スーダンと日本の経験を語る

Visually-disabled persons talk about their study at higher education institutions in Sudan & Japan

モハメド・オマル・アブディン、青木慎太郎、福地健太郎、星加良司

司会：齊藤龍一郎（AJF 事務局長）

司会： 今年3月、スーダンから日本に留学している視覚障害者たちが中心になってスーダン障害者教育支援の会 (CAPEDS) を立ち上げました。1999年から国連・アフリカ障害者の10年が取り組まれており、日本でも JICA（国際協力機構）がアフリカの障害者のキャパシティビルディングの取り組みを行っていることも関連して、非常に興味深いことだと考えます。日本の国際協力に関する基本理念である「人間の安全保障」の中でも、障害者支援は重要なテーマの一つになっています。今日は、CAPEDS の中心メンバーであるアブディンさん、福地さん、東京大学先端科学技術研究センターで障害学を研究している星加さん、立命館大学大学院で視覚障害者学生支援を研究している青木さんに、視覚障害者が高等教育機関で学ぶ意義と課題を聞き、スーダンでの視覚障害者支援活動について考える手がかりを得たいと思っています。司会者をのぞく参加者4人全員が視覚障害者という座談会です。

今回は、高校までの学校教育との関わりの中で印象に残ったこと、高等教育機関で学ぶことを通して得たことと課題、将来計画とくに就労と高等教育、そして国際協力について考えていることについて、話してください。この座談会の記録を掲載する『アフリカ NOW』の読者にとっては、学校が視覚障害者をどのように受け入れてきたのか、また視覚障害者の学校教育支援のための技術はどのようなものか、などの話題はあまりなじみのないものだと思います。技術的なことについては、別に記事を掲載しますので、この座談会では皆さん自身の体験をふまえた話を聞きたいと考えています。まず、小学校への入学から高校生活まで

の話を、星加さんにお聞きます。

普通学級か盲学校か

星加： 今日の座談会の会場である東京大学先端研のバリアフリー分野の助教として働いている星加です。愛媛県で生まれ、大学入学まで暮らしていました。5歳の時、両目を手術して失明しました。小学校に入る時、私を普通学級に入学させたいと希望する両親は、愛媛県では全盲児の普通学級入学の前例がないという教育委員会と交渉して、私の普通学級への入学を認めさせました。ですから、入学後も学校で何かあったら盲学校へ転校させようというプレッシャーがずっとありました。愛媛県では初めてのケースであるということでテレビ局の取材が続き、大学に入学した頃、私のことがテレビ番組になったことがあります。

小学校へ入学した当初は母親が学校まで付き添っていましたし、私の使う教科書や問題集などはボランティアの手で点訳されたものでした。当初は、母親と近場のボランティアだけで私のサポートに対応できていたのですが、学年が進むに連れて教育内容が増えていき、数式や化学式の記号なども点字で書く必要があるというので、全国的なネットワークで対応するようになりました。高校生のときには、試験当日にボランティアが点訳してくれた問題を解き、数学と理科はレーズライターで、他の科目は点字で回答していました。小中高と普通学級に通って大学に入学し、大学院を卒業して現在の職場にいます。

小学校5年生ぐらいから授業が楽しいと感じるよう

になりました。勉強が楽しいと感じたというよりは、おもしろい先生がいたのです。授業中に先生が言うことに突っこんで、クラスメイトを笑わせたり、先生をちょっと困らせたりすることがおもしろくなったのです。そのために一生懸命聞いているうちに、最初は社会科の成績がよくなったことを覚えています。よくわかることとか、テストでちゃんと答えられることのおもしろさや達成感・満足感みたいなものを求めるようになったのです。中学、高校の頃は、成績が良いということがアイディンティの拠り所になっていたように思います。

司会： 学校や教育委員会は、普通学級で学ぶ視覚障害者のために教科書も教材も用意してくれなかったのですね。両親が星加さんの普通学級入学にこだわったのは、何か理由があるのでしょうか。

星加： 私は、東京の病院で両目の手術を受けました。当時、東京や埼玉、大阪といった地域では、障害児が普通学級に行くことが珍しくなっており、両親はそうした状況に知っていましたし、障害児を普通学級に入れる取り組みをしている人たちとも連絡があったのだと思います。

司会： 青木さんの体験はどのようなものだったのでしょうか。

青木： 私は、立命館大学大学院で視覚障害者学生支援について研究しています。今年から、社会福祉系の大学でも障害者支援技術について教えています。私は他の3人の方と違って弱視です。点字を使うこともできますが、通常は弱視用の眼鏡を使ったり、拡大コピーやパソコンの画面表示を大きくしたりして、普通の文字を使っています。ちょうどパソコンが目の前にありますが、私の場合、画面にかなり文字を大きく表示させて見えています。

私は先天性の視覚障害の弱視です。そうすると、みなさんが「弱視って、どんなものだろう」と興味を持

たれて、「どういう風に見えるのですか」とよく聞かれます。でも、視力のある人が普通に見える状態っていうのを、私は知らないのです、どういう風に見えるか答えようがないのです。

また、私は右目しか見えていないので、幼稚園ぐらいの時の集合写真なんかを見ますと、私の顔は傾いているのです。というのも、右目がカメラの正面にあるからです。目と目の間に鼻があるはずなのに、私の中では鼻は左下にあったのです。小学校3年生か4年生ぐらいからは、右の方を意識的に向いたら鼻が真ん中になるんだろうなと思って、カメラに向かうようになりました。そうすると今度は、顔はまっすぐになっているのですが、目がいつも右斜め方向を見ているのです。

私は、大阪で生まれて育ちました。市立幼稚園に入園する時に、どのくらい見えているのかを調べるテストのようなものを受けたことがあります。幼稚園の真向かいの小学校入学に際しては何の問題もありませんでした。小学校5年生で転校するまでは幼稚園から一緒という同級生も多く、私が他の子どもたちと一緒に歩くことは問題なくできるが、落ちた消しゴムは拾えないといったことをみんな知っていたので、弱視だから困ったという覚えもありません。ところが転校した学校では、私の弱視と言う状態がなかなか理解されず、いじめを受けたりもしました。

中学校は盲学校の中等部に入学し、中学・高校と盲学校で過ごしました。両親は、将来大学へ行くことを考え、視覚障害者を対象に少人数教育を行っている盲学校を選択したようです。盲学校では一クラス4人で授業を受けていましたが、選択科目によっては一人で授業を受けることもありました。大きな文字の教科書や教材などもあって、勉強することが好きになりました。高校生の時には、大学受験のために予備校にも通いました。予備校では、弱視の私が受験勉強するためにどんな支援が必要なのかを講師や事務室に何度も説明しました。そうやって要求を整理し伝える訓練をつ



Mohamed Omer Abdin (モハメド・オマル・アブディン)：1977年スーダン・ハルツーム州生まれ。東京外国語大学大学院研究科平和構築紛争予防修士プログラム在学中。スーダン障害者教育支援の会理事。全盲。



青木 慎太郎 (あおき しんたろう)：1981年大阪府生まれ。立命館大学大学院先端総合学術研究科・グローバルCOE「生存学」創成拠点在籍。羽衣国際大学人間生活学部非常勤講師。右目・弱視、左目・視力なし。

んできたように思います。

司会： 視覚障害者＝点字使用者という先入観をどうやって変えていくのか、また、弱視者をどう支援していくのかを考えることも課題になっていますね。福地さんも、生まれ育ちは大阪ですね。

福地： 私は現在、筑波大学の学生です。2歳で両目を失明したので、20年間視覚障害者として生きています。紹介されたように生まれは大阪ですが、父が転勤したので、幼稚園は鹿児島市で通いました。ところが、鹿児島市の教育委員会が私の普通学級入学を認めなかったため、両親は新聞に投書したり、実際に学校へ通うことで入学を実現しようと努力しました。

しかし簡単に受け入れてくれそうもないので、母親の実家がある大阪へ戻り、枚方市の小学校に入学しました。大阪でも教科書の点訳がボランティアに頼るものであったなど、公的な支援の仕組みは十分ではありませんでした。

私の通った小学校、中学校の先生たちそしてクラスメイトや生徒会の仲間たちは、私のことをきっかけに点字を学び、教材やテスト問題、お知らせの点訳をやっていました。中学時代にギターを弾き覚え、軽音楽部の活動で知られていた高校に進学しました。高校時代に、タイのスラム街で育った女性の講演を聞いて、教育の重要性について考えるようになり、大学進学を希望するようになりました。

司会： 枚方市では、障害児が普通学級に通うこと自体は問題ではなかったけれど、教科書や教材などを公的に保障する仕組みがあったわけではなかったことがわかりました。それでは、スーダン・ハルツーム州で生まれ育ち、20歳で日本へやってきたアブディンさんに体験を話していただきます。

アブディン： 1998年から日本の学校で学んでいます。今年から、東京外国語大学大学院研究科平和構築

紛争予防修士プログラムに在籍しています。私は進行性の目の病気で視力を失いました。兄も弟も同じ病気で視力を失っています。小さい頃は見えていて、だんだん視力を失っていったので、弱視の経験も全盲の経験もあります。私は、地域の小学校に入学しました。

私たちの世代は、スーダンのベビーブーマーにあたり、小学校のクラスはクラス70人の生徒がいました。車いすで通っていたクラスメイトが教室に入りきれずに屋外にいさせられていたことを覚えています。気温が40℃にもなるスーダンでは、できるだけ日差しが差し込まないように窓を小さくしているため、教室の中は薄暗く、一番前にいないと黒板の文字が見えませんでした。

小さい頃は、サッカーが得意だったのですが、視力がなくなっていくとサッカーができなくなってしまいました。子どもたちの間で一目置かれるのは、サッカーがうまい子、腕力のある子、成績が良い子ということで、私は良い成績を取るために努力しました。

小学生のころまでは、印刷された文字であれば読むことができたので、歴史の本などをたくさん読みました。本を読むことができなくなってからは、耳から聞き取った授業内容や母親が読んでくれた教科書の内容を一生懸命覚えしました。教師がていねいに説明しているところや重要だと繰り返していることを中心に覚えて良い成績をとっていました。私の両親は共に高学歴でしたので、高校の教科書なども読み上げてくれたのです。でも、数式を使う数学や図形・図表を読み取ることが重要な理科は、耳から聞いただけではよく理解できず、高校卒業資格試験を受けるために、数学の過去問を40年分暗記しました。ということで記憶力には自信がありましたよ。

ハルツーム大学に入学して、初めて点字を教わる機会を得ました。高校卒業資格試験までのほとんどの試験は、下級生に問題を読み上げてもらい、回答も書いてもらうようにして受けてきました。



福地 健太郎（ふくち けんたろう）：1984年大阪府生まれ。筑波大学在学中。2006年に米国ジョージタウン大学とタイにある DPI アジア太平洋地域事務所で研修を受ける。スーダン障害者教育支援の会会員。全盲。



星加 良司（ほしか りょうじ）：1975年愛媛県生まれ。東京大学先端科学技術研究センター・バリアフリー分野助教。今年6月に『障害とは何か〜ディスアビリティの社会理論に向けて』（生活書院）を出版。全盲。

司会： スーダンには盲学校はないのですか。

アブディン： 一校だけあります。私は点字というものがあると聞いたことはあったのですが、それが一体どんなものなのか、大学生になるまでまったく知りませんでした。また、視覚障害者とは全盲の人のことだと思っていました。点字に関する情報、弱視者への支援に関する情報を提供する仕組みがないことが問題だと思いました。

高等教育機関と視覚障害者

司会： ここにいる4人は大学で学んだことがあります。視覚障害者が大学で学ぶ意義、大学で学ぶ際の障害に関わる体験を紹介して下さい。

星加： 私が入学した東京大学では、私の前に2人、全盲の学生が学んでいます。その時のサポートの仕組みやノウハウが残されていたわけではありませんが、全盲の学生をサポートしようという精神は生きていたと感じます。教職員もクラスや学科の仲間も、さまざまな形で私が学ぶことを支援してくれました。私は学生・大学院生として東京大学で11年間学びました。大学院生の時に東京大学バリアフリー支援室が設けられ、障害者学生支援が制度的に行われるようになりました。学生仲間も試験勉強に迫られている時にサポートを求めるのは心苦しいことでしたので、大学が雇用了スタッフの仕事として支援してくれるようになったことは、大きな解放感をもたらしてくれました。

大学では、教科書や与えられた教材の範囲内のことをやっていたらよかった高校までとは違い、自分で考えながら調べなくてはならないことが増え、どうやって資料を探すのかが大きな課題になりました。資料を読むために対面朗読や録音作成、点訳などが必要ですので、どんな資料でも気軽にあたってみることができないということがストレスになりました。一方で、大学進学に伴って家族とは離れ、一人暮らしをするようになったことで身につけたこともたくさんあります。

青木： 両親と私が地域の中学校ではなく、通学に1時間以上かかる盲学校中等部への進学を選択したのは、大学に進学したいという希望があったからです。盲学校高等部を経て同志社大学に入学し、修士課程まで在学しました。去年から、同じ京都にある立命館大学大学院の博士課程に在籍しています。

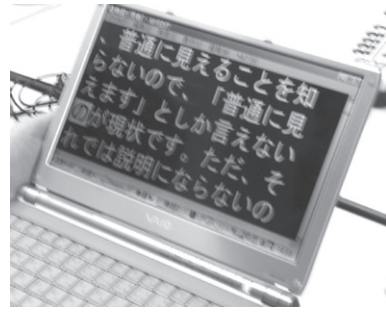
同志社大学では、私が受講した講義を担当する教員たちは、配付資料の拡大コピーを用意したり、講義中に見せているビデオの解説を席の脇でしてくれたり、サポートをしてくれました。また、私が大学に入学した頃から、大学内でもパソコンが必須のツールとなり始めていました。パソコンルームはできているものの、視覚障害者が利用するには設定の変更やスクリーンリーダーの導入が必要でした。

博士課程から移った立命館大学では、研究室からの支援は一定ありますが、大学としての支援は非常に限られています。大学院生にとっては、文献の点訳や録音作成、データ入力などが非常に重要なのですが、これらの費用を負担するのは本人なのか、大学なのか、あるいはより広く社会が負担する仕組みを作るべきなのか、という議論が必要ですね。

福地： 軽音楽部の活動が知られている高校を選んだことは、先に話しました。高校2年生くらいまでは、バンドを組んで活動することに熱中していました。

タイのスラム街で育ち、日本のNGOの支援を受けて大学で学ぶ女性が、教育の力を語るのを聞いて、大学へ進学して、教育について学ぼうと思いました。それから学校、周囲の人々の協力を得て受験勉強をして筑波大学に入りました。筑波大学には、障害学生が障害学生支援室の助力を得て有償ボランティアを探すという制度があります。私は昨年1年間、大学を休学して米国とタイで研修を受けました。米国で3カ月在籍したジョージタウン大学の障害学生支援制度と筑波大学の制度はかなり違ってきます。筑波大学では、大学の支援を受けつつも、有償の学習補助者の募集や講習は、障害学生の自主的な活動として行われています。この制度の背景には、学習補助活動を通して、障害学生は、ボランティアのコーディネートや自発的に補助を要請することを学び、健常学生は、障害学生との接し方や補助の方法を学ぶという理念があります。現在、筑波大学には、視覚障害学生が10名ほど在籍しており、音声パソコンや点字プリンタの完備した部屋もあります。

一方、アメリカの大学や東京大学の支援は、同じく大学の謝金で有償ボランティアを雇いますが、その募集や講習は、大学側の組織が行うことになっています。その根底にある理念は、障害学生は他の学生と同じように学ぶ権利があり、ゆえにボランティアの募集などの心配をしたり、コーディネートの負担を負うことは



ないというものです。ジョージタウン大学では、学習面でのサポートは心配いらないから、もっとその時間を社会的な活動に参加したり、友人と過ごしたり、他の学生と同じようにしなさいという助言を受けました。そのかわりに、学習とは関係ない補助は一切受けられないという方針でした。筑波大学とジョージタウン大学のどちらも、障害学生の学習環境は大学が責任を持って保障しなければならないという理念は共有しています。しかし、大学の関わり方にたいする考えが異なっているように、私は思います。

アブディン： ハルツーム大学法学部に入学するまで私は、同じ病気で視力を失った兄が開いた道を歩いてきました。大学に入るまで、直接知っている視覚障害者は、私たち兄弟だけでした。兄は現在、弁護士をしています。英語のできる弁護士ということで仕事の依頼がたくさんあります。兄は、視覚障害者は高等教育で学んで、就労につながる資格や能力を身につけるべきだと考えたのです。

私が入学を希望したハルツーム大学は、入学を許可した後で私が視覚障害者であることを知り、入学手続きを引き延ばしました。大学の授業が始まってから、大学に特別な要求をしないという誓約書にサインすることを条件に、入学手続きをすませることができたのです。私が大学に入学した年には、スーダンの南北内戦をめぐって大学で長期のストライキが行われました。半年近く授業もないという状態だった時に、日本留学プログラムがあることを知り応募しました。4人の応募者の中では私が一番点字ができませんでした。英語ができたので採用されたそうです。日本へやってきて、福井県立盲学校で日本語を学びながら教育を受けました。といっても、すんなりと盲学校に入学できたわけではありません。日本へ来て1カ月もたたないうちに試験を受けることになったため、入試に合

格しなかったのです。はるばるスーダンから福井県立盲学校にやってきた留学生だから受け入れようと主張した教員がいたおかげで、入学することができたのです。

盲学校で点字を学び、初めて好きな時に自分で本を読むことができるようになりました。先に話したように、私は対面朗読で本を読んでいたもので、読み上げてくれる人がいないと本を読むことができなかったのです。一夜漬けなんて不可能でした。点字を使えるようになって、夜、フツと目が覚めた時にも本を読むことができるようになったのです。また、パソコンを使って普通に文字を打てるようになり、点字を知らない人たちともコミュニケーションができるようになったことも大きな変化でした。

福井県立盲学校では、鍼灸マッサージの資格を修得することをめざして教育を行っています。私はもっと違うことを学びたかったのですが、筑波大学技術短大に進学してパソコンを学び、その後、東京外国語大学に入学して、現在は同大学大学院で平和構築について学んでいます。盲学校で点字を学び使えるようになったことで自由度が高くなりました。現在は、パソコンを使ってインターネットや大学の情報センターにアクセスしています。一方で課題として、社会科学を学ぶ上で重要な統計の仕組みを理解するために、かつては暗記で対応した数学を、点訳教科書などを使って学び直さなければならないことがあります。もっと早く点字を学ぶ機会があればよかったのと思っています。

障害者の就労と高等教育機関、国際協力活動

司会： 日本では、この30年ぐらいの間に、高等教育機関で学ぶ障害者がかなり増えていますが、大学ごとに障害学生支援のあり方が違うことがよくわかりまし

た。今日の座談会会場である東京大学先端研バリアフリー分野の福島准教授は盲ろう者、助教の星加さんは盲人、静岡県立大学には全盲の教授、長野大学には脳性マヒ者の教授がいるなど、日本では障害者の大学教員もいますが、スーダンではどうでしょうか。

アブディン： ハルツーム大学で3人の障害者が助手として採用されています。彼らは学業成績が優秀だったので、助手として大学に残ることを選択できたのです。最近、ハルツーム大学創立100周年のセレモニーが開催された際に、学長が障害者にも学びの場を提供しているとスピーチした機会を捉えて、視覚障害者の助手が視覚障害者用のパソコン導入と情報支援の必要性を訴え、要求を認めさせるということがありました。

現在、スーダンの失業率は50%くらいだと言われています。さまざまな仕事に対応できる健常者ですら仕事がないので、音楽の才能があって演奏活動で収入を得る、あるいは記憶力を活かしてコーランを暗誦するイマームとして生活するといったことができるごく限られた人たちを除けば、多くの視覚障害者は家族や親族の支援のもとで仕事もなく暮らしています。日本とは違って社会保障制度が発達していないので、物乞いをする障害者もいます。仕事がなく働く場がないために生き甲斐を見いだせず、イスラム社会では良くないこととされている飲酒をする障害者もいます。全盲の私の兄は、ハルツーム大学を出て弁護士になりました。英語ができるので、最近増えている外資系企業からの仕事の依頼が多いそうです。パソコンも覚えたと言っています。資格や能力を身につけていれば、スーダンのような社会でも障害者が仕事に就くことができます。

私が日本へ来てしばらくしてからスーダンでは、少数民族や障害者を対象としたアフーマティブアクションを実施する法律ができ、ハルツーム大学で学ぶ障害者もずいぶん増えました。しかし、日本のように大学に障害学生支援センターがあるわけではありません。

スーダン障害者教育支援の会では、初等・中等教育への点字導入のために、スーダンの教育省や障害児教育拠点校に点字板を提供してきました。ブラインドサッカー普及と並んで、ハルツーム大学障害者学生支援センター設置のためのアラビア語スクリーンリーダー搭載パソコンの提供を、当面の目標としています。スーダンの周囲の国であるエジプトやサウジアラビアでは、スーダンよりも視覚障害者支援の仕組みや取り組

みが進んでいます。アラビア語を使うこれらの国々の経験に学びながら、スーダンでの障害者支援が進むように働きかけていきたいと考えています。

福地： 私は昨年、米国の大学の障害者自立支援センターで研修を受けた後で、タイにある DPI (Disabled Peoples' International、障害者インターナショナル) アジア太平洋地域事務所でインターンとして障害者の権利擁護活動の国際的動向や資金調達について学び、1年間の研修の締めくくりとして「国連障害者の権利条約」準備委員会の傍聴行動に参加しました。そして、こうした体験をいかしたいと、ある国際協力機関のスタッフの採用に応募しました。この機関では、書類選考に続く二次選考が、ウェブサイト上の設問に答える形で行われています。ところが、このウェブサイトの設問をスクリーンリーダーで読みとることができなかったのです。横で朗読と入力をする介助者をつけることが認められていましたが、指定された時間内に設問に答えようとすると朗読スピードが追いつかないという事態になりました。また、グラフの読解のような問題では、介助者がうまく説明できないような問題がほとんどでした。また別の国際協力機関では、就職相談をしたのに、視覚障害者が就職試験を受けた際の配慮について情報を提供してくれません。どちらの国際協力機関も視覚障害者が応募することを想定していなかったのではないかと思います。

司会： スーダンの状況については、アブディンさんと福地さんたちが作ったスーダン障害者教育を支援する会が作成したパンフレットもあります（ウェブサイトの URL は、<http://caped.s.rakurakuhp.net/>）。立命館のグローバル COE「生存学」創成拠点と協力して、京都、岐阜にいる留学生とも座談会あるいは聞き取りを行う予定です。高等教育機関で学んだ視覚障害者が国際協力活動に寄与できることはたくさんあります。国際協力機関が視覚障害者をスタッフとして採用し、当事者でなければ出てこない意見や発想を活かして欲しいという希望も表明して、今日はこれで終わりにします。皆さん、ありがとうございました。

●日時：2007年8月9日

●会場：東京大学先端科学技術研究センター
3号館601号セミナー室

視覚障害者への情報保障の技術と課題

Information-access technology for visually disabled persons

斉藤龍一郎／SAITO Ryoichiro

全盲あるいは弱視の視覚障害者が教育を受け、研究を行うにあたって、どのようにして情報を得ているのか、そして情報保障に関してどのような課題があるのかについて、簡単に紹介しよう。全盲の人は、点字やレーズライターなどを使って触覚から、あるいは会話、講演、朗読などにより聴覚を通して教育を受け、さまざまな情報を得ている。弱視者であれば、視力の程度に応じた拡大文字を利用することもできる。点字を習得したりレーズライターに書かれた文字を読みなれるためには、適切な指導を受けることが必要になる。点字文書を作成するためには、点字板や点字タイプライターを使う。近年、パソコン上で動く点訳ソフトと点字プリンターを使って点字文書を作成することも増えている。

点字で出版される新聞・雑誌・書籍はほとんどなく、点字使用者が晴眼者と同じ文献にあたるためには、多くの場合、新たに点訳が必要になるため、点

訳者や点訳を提供してくれる機関を確保しなければならない。一方で、書籍内容を電子テキストで提供する出版社や、点訳する際の著作権に関してあらかじめ必要な手続きを明記した書籍なども増えている。電子テキストで提供された書籍データは、パソコン上で作動する音声読み上げソフトを使って聞き取ることできる。拡大文字を利用するためには、拡大コピーする、パソコンの表示文字を大きなサイズにする、といった機器利用の機会や機器使用技術習得が必要になる。

対話や少人数の会話・討論であれば、視覚障害者も質問や意見を出しやすいが、板書やプレゼンテーション、ビデオなどを使用する講義や講演などの際には、板書やプレゼンテーションの内容を点訳した資料を用意する、あるいは記述内容や画像の説明を行う要員を視覚障害者に付けるなどの支援が必要になってくる。

後紛争国ルワンダにおける障害者の現状

The present state of disabled persons in Rwanda after the conflict

曾田 夏記／SODA Natsuki

ルワンダでは崩壊した制度やサービスの再建、治安維持や国民和解に関わる除隊兵士の問題、社会的弱者である孤児や寡婦の急増など、紛争後ならではの課題が山積している。そのためリソースのない政府にとって障害者問題の優先順位は低く、また不十分な障害者配慮と社会における態度的障壁によって、障害者は復興開発のプロセスから疎外されていると考えられる。

障害を持つ子どもの教育を例にとって考えてみよう。まず「社会的弱者の教育」向けの予算は一括であり、使途の多くは孤児対策にあてられるため、教師の訓練や点字教材など障害児の教育ニーズに対応するための予算は不足する（政治的優先順位の問題）。仮にルワンダでインクルーシブな教育体制が発達したとしても、家族や学校側が障害児の教育ニーズを理解せず通学を認めない（態度的障壁の問題）、識字能力がないため仕事が見つからない（障害と貧困の問題）、国際 NGO がやっている失業者対策のため

の職業訓練プログラムに参加したいが物理的にアクセスできない（不十分な障害者配慮の問題）…など、後紛争国ルワンダにおいては、障害者の前にさまざまな問題が立ち現れている。

1990年代における内戦の多発は、アフリカ障害者の10年がアジア太平洋地域から遅れてスタートした一つの要因になっている。紛争予防はもちろんだが、「紛争後の障害者支援」や「障害と紛争」の関連について、さらなる取組みと研究がなされていくことが必要なのではないだろうか。

写真説明：就学・就労の機会平等と社会参加を保障するために具体的に必要とされることが「行動計画」に記されている（撮影：曾田夏記）。

